日本名家作品选读

——芥川龙之介

日本の名家の作品
アンソロジー

聂中华 曾文雅 译
晋学新 审校

四川大学出版社

日本名家作品选读

——芥川龙之介

日本の名家の作品
アンソロジー

聂中华 曾文雅 译
晋学新 审校

四川大学出版社

责任编辑:黄新路
责任校对:孟庆发　晋学新
封面设计:米茄设计工作室
责任印制:杨丽贤

图书在版编目(CIP)数据

日本名家作品选读——芥川龙之介 /(日)芥川龙之介著;聂中华,曾文雅译. —成都:四川大学出版社,2007.1
ISBN 978-7-5614-3599-1

Ⅰ.日...　Ⅱ.①芥...　②聂...　③曾...　Ⅲ.①日语-汉语-对照读物②文学-作品综合集-日本-现代
Ⅳ.H369.4:I

中国版本图书馆CIP数据核字(2006)第162644号

书名　日本名家作品选读——芥川龙之介

译　　者　聂中华　曾文雅
出　　版　四川大学出版社
地　　址　成都市一环路南一段24号(610065)
发　　行　四川大学出版社
书　　号　ISBN 978-7-5614-3599-1/H·229
印　　刷　郫县犀浦印刷厂
成品尺寸　195 mm×210 mm
印　　张　25
字　　数　826千字
版　　次　2007年2月第1版
印　　次　2007年2月第1次印刷
印　　数　0 001～3 000册
定　　价　42.00元

版权所有◆侵权必究

◆读者邮购本书,请与本社发行科联系。电话:85408408/85401670/85408023　邮政编码:610065
◆本社图书如有印装质量问题,请寄回出版社调换。
◆网址:www.scupress.com.cn

前　言

文学是了解一个民族、一种文化的窗口。文化传统、风俗习惯、心理素质、语言特点、政治经济生活都会成为文学作品表现的内容，对于每一位日语学习者来说，对于每一位日本研究者来说，多读一些日本文学作品都是必要的，也是应该的。长期从事日本研究的专家、学者也有义务向中国的读者介绍优秀的文学作品，让中国人更多了解日本，了解日本民族。多一分了解，也就能多播下一颗友谊共存的希望的种子。

正是基于以上考虑，笔者在五年前就萌发翻译一些日本文学名篇的想法。最先开始接触的是芥川龙之介的作品，芥川 1892 年生于东京，是大作家夏目漱石的晚年弟子，是二十世纪初日本“新思潮派”最为重要的代表作家，他集新现实主义、新理智派和新技巧派文学特点于一身，代表了当时日本文学的最高成就。虽然芥川死时年仅 35 岁，但留下了几百篇文学作品，篇篇都是精品，都值得我们好好研读。

芥川的作品中，不乏语言描写生动自然、充满悬念的精品。芥川擅长通过生动的故事描述来探究相对抽象的观念问题。如《罗生门》描述了一个平安末期世态凋敝的京都黄昏，一位被解雇，走投无路的仆人在罗生门下避雨，爬上门楼发现一个老太婆在揪拔死人的头发，做假发出卖。一个生动的故事引人深思——仆人和身为盗贼的老妪处于同样的境况或生存理由中，是否便摆脱或脱离了现世的道德规约？

中篇小说《地狱变》也是芥川同类小说重要的代表作。小说主人公是孤高居傲的画师良秀，他把艺术看得高于一切。在权倾一时的堀川大公命令下，良秀全神贯注地绘制画“地狱图”。然而画家无从构思年轻女人被焚死在槟榔毛车的中心画面。小说同时写到，大公老爷倾心于良秀之女，想要占有却不能得逞，于是，大公老爷居心叵测地答应良秀，“槟榔毛车点燃大火，车里坐着一位艳丽女人，还要贵女装扮”。谁知，在槟榔毛车上，锁链捆绑的正是良秀之女。眼见自己心爱的女儿任烈火烧遍全身，画师良秀虽也身不由已地奔向车子，但这种痛苦瞬间就被艺术的追求所压倒，他很快从一个父亲的立场转向画师的立场。良秀看到的只有美丽火焰的颜色，以及在火焰里遭受痛苦的年轻女人的样子……良秀如愿以偿地完成了画作，之后便悬梁自尽。说到底，

《地狱变》通过极端化的人间悲剧描写了权力与艺术的对垒，因而被称作芥川“艺术至上主义”的一个宣言。作品中还蕴涵着作者一以贯之的探究——画家良秀宁愿亲女焚死的艺术至上主义是否显得过于无情和残酷？

芥川的作品内涵丰富，思想深刻，在今天读来，仍然发人深思。芥川的优秀作品实在太多，本书从中选取二十八篇有代表性的作品，并译成中文。由于笔者语言水平不高，文学素养有限，虽然历时五年，仍然诚惶诚恐，不尽如意之处肯定存在，恳请同行，读者指正。

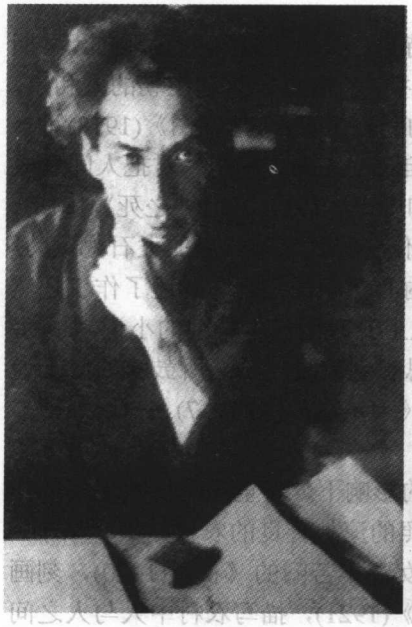
译者

浙江工商大学

2006 年 5 月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作 者 简 介



芥川龙之介肖像

芥川龙之介 (1892～1927)

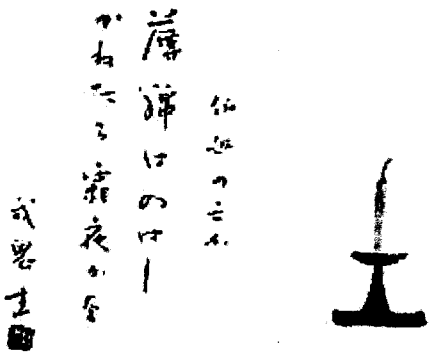
日本小说家。号柳川隆之介、澄江堂主人、寿陵余子。能赋俳句，俳号我鬼。生于东京。本姓新原，父亲经营牛奶业。生后 9 个月，因母亲神经失常，过继给舅父做养子，改姓芥川。芥川家世世代代在将军府任文职，明治维新后，养父在东京府任土木科长。养父母精通诗书琴画，家庭里

有浓厚的传统文化艺术气氛。芥川自幼受到中日古典文学的熏陶。上中学后广泛涉猎欧美文学，喜读易卜生、法朗士、波德莱尔、斯特林堡等人的作品，深受世纪末文学的影响。

1913 年入东京大学英文系。学习期间，成为第 3 次和第 4 次复刊的《新思潮》杂志同人。1915 年发表《罗生门》，并未引起文坛重视。1916 年大学毕业之前，在第 4 次复刊的《新思潮》上发表《鼻子》(1916)，受到夏目漱石的赞赏。《芋粥》(1916)和《手绢》(1916)接连问世，从而奠定了作为新进作家的地位。大学毕业后，在镰仓海军机关学校任教 3 年。1919 年入大阪每日新闻社。1921 年以新闻社海外特派员身份到中国游览，回国后写了《上海游记》(1921)、《江南游记》(1922)等。

芥川龙之介是新思潮派的代表作家，创作上既有浪漫主义特点，又具有现实主义倾向。早期的作品以历史小说为主，借古喻今，针砭时弊。其作品可分为 5 类：①取材于封建王朝的人和事，如《罗生门》和《鼻子》系根据古代故事改编，揭露风行于世的利己主义；《地狱图》(1918)写一个服务于封建公侯的画师为了追求艺术上的成就而献出女儿和自己的生命，抨击暴君把人间变成了地狱。②取材于近世传入日本的天主教的传教活动，如《烟草和魔鬼》(1917)、《信徒之死》(1918)、《众神的微笑》(1922)等。③描述江户时代的社会现象，如《戏作三昧》、《某一天的大石内藏助》（均 1917）等。在《戏作三昧》中，通过对主人公泷泽马琴的内心活动的描写，阐述了作者超然于庸俗丑恶的现实之外的处世哲学。④描绘明治维新后资本主义上升时期日本社会的小说，如《手绢》（1916）、《舞会》(1920)等。《手绢》讽刺了日本明治时期思想家新渡户稻造所鼓吹的武士道精神。⑤取材于中国古代传说的作品，如《女体》、《黄粱梦》、《英雄器》(均 1917)、《杜子春》、《秋山图》（均 1920）等。

十月革命后，日本无产阶级文学开始萌芽，芥川也在时代的影响下，着重描写反映现实的作品。其中有歌颂与小资产阶级知识分子的颓唐消沉形成明显对照的淳朴善良的农村姑娘《桔子》(1919)，表现现代男女青年苦闷的《秋》(1920)，刻画少年心理的《手推车》(1921)，描写农村中人与人之间关系的《一块地》（1923），嘲讽乃木希典的《将军》（1920）以及批判军国主义思想、对下层士兵寄予同情的《猴子》（1916）和《三个宝》(1927)。



芥川晚期的作品,反映了他对贫富悬殊的社会现实的幻灭感。1927 年初发表《玄鹤山房》，通过老画家之死，揭露家庭内部的纠葛，反映了人生的惨淡和绝望心情，暗示旧事物的衰亡和新时代的来临。写这篇作品时，芥川已萌自杀的念头，使以后的作品如《海市

蜃楼》等充满了阴郁气氛。《河童》(1927)通过虚构的河童国，抨击人吃人的资本主义制度。遗作《齿轮》和《某傻子的一生》(1927)描述作者生前的思想状态。评论集《侏儒的话》(1923～1927)阐述了他对艺术和人生的看法。

20 年代末期，日本社会的阶级斗争日益尖锐，芥川意识到自身的矛盾和软弱无力，因“对未来的模模糊糊的不安”(《给一个旧友的手记》，1927)，终于在精神极度苦闷中自杀。

在短短 12 年的创作生涯中，芥川写了 148 篇小说，55 篇小品文，66 篇随笔，以及大量的评论、游记、札记、诗歌等。他的每一篇小说，题材内容和艺术构思都各有特点，这是他在创作过程中苦心孤诣地不断进行艺术探索的结果。他的文笔典雅俏丽，技巧纯熟，精深洗练，意趣盎然，别具一格。在日本大正时期的作家中占有重要地位。为了纪念芥川在文学上的成就，从 1935 年起设立以他命名的“芥川文学奖”，该奖一直是日本奖励优秀青年作家的最高文学奖。

——摘自 http://blog.sina.com.cn/m/lishangyu

目　录

地獄変 /地狱图 1
偸盗 /盗贼 44
藪の中 /竹林中 120
芋粥 /芋粥 135
羅生門 /罗生门 159
南京の基督 /南京的基督 170
二人小町 /两位小町 186
寒さ /寒冷 200
酒虫 /酒虫 208
猿蟹合戦 /猿蟹合战 220
秋 /秋天 225
河童 /河童 243
戯作三昧 /戏作三昧 308
老いたる素戔嗚尊 /老年的素盏鸣尊 347
蜘蛛の糸 /蜘蛛丝 370
女体 /女体 375
沼地 /沼泽地 378

六の宮の姫君 /六宫公主 383
夢 /梦 395
死後 /死后 406
秋山図 /秋山图 413
俊寛 /俊宽 428
白 /白 457
早春 /早春 471
杜子春 /杜子春 478
トロッコ /矿车 495
鼻 /鼻子 503
報恩記 /报恩记 514
魔術 /魔术 538
蜜柑 /蜜橘 551
仙人 /仙人 557
舞踏会 /舞会 564
山鴫 /山鹬 574

地獄変

一

堀川の大殿様（おほとのさま）のやうな方は、これまでは固（もと）より、後の世には恐らく二人とはいらつしやいますまい。噂に聞きますと、あの方の御誕生になる前には、大威徳明王（だいゐとくみやうおう）の御姿が御母君（おんははぎみ）の夢枕にお立ちになつたとか申す事でございますが、兎（と）に角（かく）御生れつきから、並々の人間とは御違ひになつてゐたやうでございます。でございますから、あの方の為（な）さいました事には、一つとして私どもの意表に出てゐないものはございません。早い話が堀川のお邸の御規模を拝見致しましても、壮大と申しませうか、豪放と申しませうか、到底（たうてい）私どもの凡慮には及ばない、思ひ切つた所があるやうでございます。中にはまた、そこを色々とあげつらつて大殿様の御性行を始皇帝（しくわうてい）や煬帝（やうだい）に比べるものもございますが、それは諺（ことわざ）に云ふ群盲（ぐんもう）の象を撫（な）でるやうなものでもございませうか。あの方の御思召（おおぼしめし）は、決してそのやうに御自分ばかり、栄耀栄華をなさらうと申すのではございません。それよりはもつと下々の事まで御考へになる、云はば天下と共に楽しむとでも申しさうな、大腹中（だいふくちう）の御器量がございました。

それでございますから、二条大宮の百鬼夜行（ひやつきやぎやう）に御遇ひになつても、格別御障（おさは）りがなかつたのでございませう。又陸奥（みちのく）の塩竈（しほがま）の景色を写したので名高いあの東三条の河原院に、夜な現はれると云ふ噂のあつた融（とほる）の左大臣の霊でさへ、大殿様のお叱りを受けては、姿を消したのに相違ございますまい。かやうな御威光でございますから、その頃洛中の老若男女が、大殿様と申しますと、まるで権者（ごんじや）の再来のやうに尊み合ひましたも、決して無理ではございません。何時ぞや、内の梅花の宴からの御帰りに御車の牛が放れて、折から通りかゝつた老人に怪我をさせました時でさへ、その老人は手を合せて、大殿様の牛にかけられた事を難有がつたと申す事でございます。

さやうな次第でございますから、大殿様御一代の間には、後々までも語り草になりますやうな事が、随分沢山にございました。大饗（おほみうけ）の引出物に白馬（あをうま）ばかりを三十頭、賜（たまは）つたこともございますし、長良（ながら）の橋の橋柱（はしばしら）に御寵愛の童（わらべ）を立てた事もございますし、それから又華陀（くわだ）の術を伝へた震旦（しんたん）の僧に、御腿（おんもも）の瘡（もがさ）を御切らせになつた事もございます

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

し、――一々数へ立てゝ居りましては、とても際限がございません。が、その数多い御逸事の中でも、今では御家の重宝になつて居ります地獄変の屏風の由来程、恐ろしい話はございますまい。日頃は物に御騒ぎにならない大殿様でさへ、あの時ばかりは、流石（さすが）に御驚きになつたやうでございました。まして御側に仕へてゐた私どもが、魂も消えるばかりに思つたのは、申し上げるまでもございません。中でもこの私なぞは、大殿様にも二十年来御奉公申して居りましたが、それでさへ、あのやうな凄じい見物（みもの）に出遇つた事は、ついぞ又となかつた位でございます。

しかし、その御話を致しますには、予め先づ、あの地獄変の屏風を描きました、良秀（よしひで）と申す画師の事を申し上げて置く必要がございませう。

二

良秀と申しましたら、或は唯今でも猶、あの男の事を覚えていらつしやる方がございませう。その頃絵筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な絵師でございます。あの時の事がございました時には、彼是もう五十の阪（さか）に、手がとゞいて居りましたらうか。見た所は唯、背の低い、骨と皮ばかりに痩せた、意地の悪さうな老人でございました。それが大殿様の御邸へ参ります時には、よく丁字染（ちやうじぞめ）の狩衣（かりぎぬ）に揉烏帽子（もみゑぼし）をかけて居りましたが、人がらは至つて卑しい方で、何故か年よりらしくもなく、唇の目立つて赤いのが、その上に又気味の悪い、如何にも獣めいた心もちを起させたものでございます。中にはあれは画筆を舐（な）めるので紅がつくのだなどゝ申した人も居りましたが、どう云ふものでございませうか。尤もそれより口の悪い誰彼は、良秀の立居（たちゐ）振舞（ふるまひ）が猿のやうだとか申しまして、猿秀と云ふ諢名（あだな）までつけた事がございました。

いや猿秀と申せば、かやうな御話もございます。その頃大殿様の御邸には、十五になる良秀の一人娘が、小女房（こねうばう）に上つて居りましたが、これは又生みの親には似もつかない、愛嬌のある娘（こ）でございました。その上早く女親に別れましたせゐか、思ひやりの深い、年よりはませた、悧巧な生れつきで、年の若いのにも似ず、何かとよく気がつくものでございますから、御台様（みだいさま）を始め外の女房たちにも、可愛がられて居たやうでございます。

すると何かの折に、丹波の国から人馴れた猿を一匹、献上したものがございまして、それに丁度悪戯盛（いたづらさか）りの若殿様が、良秀と云ふ名を御つけになりました。唯でさへその猿の容子が可笑（をか）しい所へ、かやうな名がついたのでございますから、御邸中誰一人笑はないものはございません。それも笑ふばかりならよろしうございますが、面白半分に皆の

ものが、やれ御庭の松に上つたの、やれ曹司（ざうし）の畳をよごしたのと、その度毎に、良秀々々と呼び立てゝは、兎に角いぢめたがるのでございます。

所が或日の事、前に申しました良秀の娘が、御文を結んだ寒紅梅の枝を持つて、長い御廊下を通りかゝりますと、遠くの遣戸（やりど）の向うから、例の小猿の良秀が、大方足でも挫（くじ）いたのでございませう、何時ものやうに柱へ駆け上る元気もなく、跛（びつこ）を引き引き、一散に、逃げて参るのでございます。しかもその後からは楚（すばえ）をふり上げた若殿様が「柑子（かうじ）盗人（ぬすびと）め、待て。待て。」と仰有（おつしや）りながら、追ひかけていらつしやるのではございませんか。良秀の娘はこれを見ますと、ちよいとの間ためらつたやうでございますが、丁度その時逃げて来た猿が、袴の裾にすがりながら、哀れな声を出して啼き立てました——と、急に可哀さうだと思ふ心が、抑へ切れなくなつたのでございませう。片手に梅の枝をかざした儘、片手に紫匂（むらさきにほひ）の袿（うちぎ）の袖を軽さうにはらりと開きますと、やさしくその猿を抱き上げて、若殿様の御前に小腰をかゞめながら「恐れながら畜生でございます。どうか御勘弁遊ばしまし。」と、涼しい声で申し上げました。

が、若殿様の方は、気負（きお）つて駆けてお出でになつた所でございますから、むづかしい御顔をなすつて、二三度御み足を御踏鳴（おふみなら）しになりながら、

「何でかばふ。その猿は柑子盗人だぞ。」

「畜生でございますから、……」

娘はもう一度かう繰返しましたがやがて寂しさうにほほ笑みますと、

「それに良秀と申しますと、父が御折檻（ごせつかん）を受けますやうで、どうも唯見ては居られませぬ。」と、思ひ切つたやうに申すのでございます。これには流石（さすが）の若殿様も、我（が）を御折りになつたのでございませう。

「さうか。父親の命乞（いのちごひ）なら、枉（ま）げて赦（ゆる）してとらすとしよう。」

不承無承にかう仰有ると、楚（すばえ）をそこへ御捨てになつて、元いらしつた遣戸の方へ、その儘御帰りになつてしまひました。

三

良秀の娘とこの小猿との仲がよくなつたのは、それからの事でございます。娘は御姫様から頂戴した黄金の鈴を、美しい真紅（しんく）の紐に下げて、それを猿の頭へ懸けてやりますし、猿は又どんな事がございましても、滅多に娘の身のまはりを離れません。或時娘の風邪（かぜ）の心地で、床に就きました時なども、小猿はちやんとその枕もとに坐りこんで、気のせゐか心細さうな顔をしながら、頻（しきり）に爪を噛んで居りました。

かうなると又妙なもので、誰も今までのやうにこの小猿を、いぢめるものはございません。

いや、反（かへ）つてだんだん可愛がり始めて、しまひには若殿様でさへ、時々柿や栗を投げて御やりになつたばかりか、侍の誰やらがこの猿を足蹴（あしげ）にした時なぞは、大層御立腹にもなつたさうでございます。その後大殿様がわざわざ良秀の娘に猿を抱いて、御前へ出るやうと御沙汰になつたのも、この若殿様の御腹立になつた話を、御聞きになつてからだとか申しました。その序（ついで）に自然と娘の猿を可愛がる所由（いはれ）も御耳にはいつたのでございませう。

「孝行な奴ぢや。褒めてとらすぞ。」

かやうな御意で、娘はその時、紅（くれなゐ）の袙（あこめ）を御褒美に頂きました。所がこの袙を又見やう見真似に、猿が恭しく押頂きましたので、大殿様の御機嫌は、一入（ひとしほ）よろしかつたさうでございます。でございますから、大殿様が良秀の娘を御贔屓（ひいき）になつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行恩愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた訳ではございません。尤もかやうな噂の立ちました起りも、無理のない所がございますが、それは又後になつて、ゆつくり御話し致しませう。こゝでは唯大殿様が、如何に美しいにした所で、絵師風情（ふぜい）の娘などに、想ひを御懸けになる方ではないと云ふ事を、申し上げて置けば、よろしうございます。

さて良秀の娘は、面目を施して御前を下りましたが、元より悧巧な女でございますから、はしたない外の女房たちの妬（ねたみ）を受けるやうな事もございません。反つてそれ以来、猿と一しよに何かといとしがられまして、取分け御姫様の御側からは御離れ申した事がないと云つてもよろしい位、物見車の御供にもついぞ欠けた事はございませんでした。

が、娘の事は一先づ措（お）きまして、これから又親の良秀の事を申し上げませう。成程（なるほど）猿の方は、かやうに間もなく、皆のものに可愛がられるやうになりましたが、肝腎（かんじん）の良秀はやはり誰にでも嫌はれて、相不変（あひかはらず）陰へまはつては、猿秀呼（よばは）りをされて居りました。しかもそれが又、御邸の中ばかりではございません。現に横川（よがは）の僧都様も、良秀と申しますと、魔障にでも御遇ひになつたやうに、顔の色を変へて、御憎み遊ばしました。（尤もこれは良秀が僧都様の御行状を戯画（ざれゑ）に描いたからだなどと申しますが、何分下（しも）ざまの噂でございますから、確に左様とは申されますまい。）兎に角、あの男の不評判は、どちらの方に伺ひましても、さう云ふ調子ばかりでございます。もし悪く云はないものがあつたと致しますと、それは二三人の絵師仲間か、或は又、あの男の絵を知つてゐるだけで、あの男の人間は知らないものばかりでございませう。

しかし実際、良秀には、見た所が卑しかつたばかりでなく、もつと人に嫌がられる悪い癖があつたのでございますから、それも全く自業自得とでもなすより外に、致し方はございません。

四

その癖と申しますのは、吝嗇（りんしよく）で、慳貪（けんどん）で、恥知らずで、怠けもので、強慾で――いやその中でも取分け甚しいのは、横柄で高慢で、何時も本朝第一の絵師と申す事を、鼻の先へぶら下げてゐる事でございませう。それも画道の上ばかりならまだしもでございますが、あの男の負け惜しみになりますと、世間の習慣（ならはし）とか慣例（しきたり）とか申すやうなものまで、すべて莫迦（ばか）に致さずには置かないのでございます。これは永年良秀の弟子になつてゐた男の話でございますが、或日さる方の御邸で名高い檜垣（ひがき）の巫女（みこ）に御霊（ごりやう）が憑（つ）いて、恐しい御託宣があつた時も、あの男は空耳（そらみゝ）を走らせながら、有合せた筆と墨とで、その巫女の物凄い顔を、丁寧に写して居つたとか申しました。大方御霊の御祟（おたた）りも、あの男の眼から見ましたなら、子供欺し位にしか思はれないのでございませう。

さやうな男でございますから、吉祥天を描く時は、卑しい傀儡（くぐつ）の顔を写しましたり、不動明王を描く時は、無頼（ぶらい）の放免（はうめん）の姿を像（かたど）りましたり、いろいろの勿体（もつたい）ない真似を致しましたが、それでも当人を詰（なじ）りますと「良秀の描（か）いた神仏が、その良秀に冥罰（みやうばつ）を当てられるとは、異な事を聞くものぢや」と空嘯（そらうそぶ）いてゐるではございませんか。これには流石の弟子たちも呆れ返つて、中には未来の恐ろしさに、匆々暇をとつたものも、少くなかつたやうに見うけました。――先づ一口に申しましたなら、慢業重畳（まんごふちようでふ）とでも名づけませうか。兎に角当時天（あめ）が下（した）で、自分程の偉い人間はないと思つてゐた男でございます。

従つて良秀がどの位画道でも、高く止つて居りましたかは、申し上げるまでもございますまい。尤もその絵でさへ、あの男のは筆使ひでも彩色でも、まるで外の絵師とは違つて居りましたから、仲の悪い絵師仲間では、山師だなどと申す評判も、大分あつたやうでございます。その連中の申しますには、川成（かはなり）とか金岡（かなをか）とか、その外昔の名匠の筆になつた物と申しますと、やれ板戸の梅の花が、月の夜毎に匂つたの、やれ屏風の大宮人（おほみやびと）が、笛を吹く音さへ聞えたのと、優美な噂が立つてゐるものでございますが、良秀の絵になりますと、何時でも必ず気味の悪い、妙な評判だけしか伝はりません。譬（たと）へばあの男が龍蓋寺（りゆうがいじ）の門へ描きました、五趣生死（ごしゆしやうじ）の絵に致しましても、夜更（よふ）けて門の下を通りますと、天人の嘆息（ためいき）をつく音や啜り泣きをする声が、聞えたと申す事でございます。いや、中には死人の腐つて行く臭気を、嗅いだと申すものさへございました。それから大殿様の御云ひつけで描いた、女房たちの似絵（にせゑ）なども、その絵に写されたゞけの人間は、三年と尽（た）たない中に、皆魂の抜けたやうな病気になって、死んだと申すではございませんか。悪く云ふものに申させますと、それが

良秀の絵の邪道に落ちてゐる、何よりの証拠ださうでございます。

が、何分前にも申し上げました通り、横紙破りな男でございますから、それが反つて良秀は大自慢で、何時ぞや大殿様が御冗談に、「その方は兎角醜いものが好きと見える。」と仰有つた時も、あの年に似ず赤い唇でにやりと気味悪く笑ひながら、「さやうでござりまする。かいなでの絵師には総じて醜いものの美しさなどと申す事は、わからう筈がございませぬ。」と、横柄に御答へ申し上げました。如何に本朝第一の絵師に致せ、よくも大殿様の御前へ出て、そのやうな高言が吐けたものでございます、先刻引合に出しました弟子が、内々師匠に「智羅永寿（ちらえいじゅ）」と云ふ諢名をつけて、増長慢を譏（そし）つて居りましたが、それも無理はございません。御承知でもございませうが、「智羅永寿」と申しますのは、昔震旦から渡つて参りました天狗の名でございます。

しかしこの良秀にさへ——この何とも云ひやうのない、横道者の良秀にさへ、たつた一つ人間らしい、情愛のある所がございました。

五

と申しますのは、良秀が、あの一人娘の小女房をまるで気違ひのやうに可愛がつてゐた事でございます。先刻申し上げました通り、娘も至つて気のやさしい、親思ひの女でございましたが、あの男の子煩悩（こぼんなう）は、決してそれにも劣りますまい。何しろ娘の着る物とか、髪飾とかの事と申しますと、どこの御寺の勧進にも喜捨をした事のないあの男が、金銭には更に惜し気もなく、整へてやると云ふのでございますから、嘘のやうな気が致すではございませんか。

が、良秀の娘を可愛がるのは、唯可愛がるだけで、やがてよい聟をとらうなどと申す事は、夢にも考へて居りません。それ所か、あの娘へ悪く云ひ寄るものでもございましたら、反つて辻冠者（つじくわんじゃ）ばらでも駆り集めて、暗打（やみうち）位は喰はせ兼ねない量見でございます。でございますから、あの娘が大殿様の御声ががりで、小女房に上りました時も、老爺（おやぢ）の方は大不服で、当座の間は御前へ出ても、苦り切つてばかり居りました。大殿様が娘の美しいのに御心を惹かされて、親の不承知なのもかまはずに、召し上げたなどと申す噂は、大方かやうな容子を見たものゝ当推量（あてずゐりやう）から出たのでございませう。

尤も其噂は嘘でございましても、子煩悩の一心から、良秀が始終娘の下るやうに祈つて居りましたのは確でございます。或時大殿様の御云ひつけで、稚児文殊（ちごもんじゆ）を描きました時も、御寵愛の童（わらべ）の顔を写しまして、見事な出来でございましたから、大殿様も至極御満足で、

「褒美には望みの物を取らせるぞ。遠慮なく望め。」と云ふ難有い御言（おことば）が下り

ました。すると良秀は畏まつて、何を申すかと思ひますと、

「何卒私の娘をば御下げ下さいまするやうに。」と臆面もなく申し上げました。外のお邸ならば兎も角も、堀河の大殿様の御側に仕へてゐるのを、如何に可愛いからと申しまして、かやうに無躾（ぶしつけ）に御暇を願ひますものが、どこの国に居りませう。これには大腹中の大殿様も聊（いさゝ）か御機嫌を損じたと見えまして、暫くは唯、黙つて良秀の顔を眺めて御居でになりましたが、やがて、

「それはならぬ。」と吐出（はきだ）すやうに仰有ると、急にその儘御立になつてしまひました。かやうな事が、前後四五遍もございましたらうか。今になつて考へて見ますと、大殿様の良秀を御覧になる眼は、その都度にだんだんと冷やかになつていらしつたやうでございます。すると又、それにつけても、娘の方は父親の身が案じられるせゐでゞもございますか、曹司へ下つてゐる時などは、よく袿（うちぎ）の袖を噛んで、しくしく泣いて居りました。そこで大殿様が良秀の娘に懸想（けさう）なすつたなどと申す噂が、愈々拡がるやうになつたのでございませう。中には地獄変の屏風の由来も、実は娘が大殿様の御意に従はなかつたからだなどと申すものも居りますが、元よりさやうな事がある筈はございません。

私どもの眼から見ますと、大殿様が良秀の娘を御下げにならなかつたのは、全く娘の身の上を哀れに思召したからで、あのやうに頑（かたくな）な親の側へやるよりは御邸に置いて、何の不自由なく暮させてやらうと云ふ難有い御考へだつたやうでございます。それは元より気立ての優しいあの娘を、御贔屓になつたのには間違ひございません。が、色を御好みになつたと申しますのは、恐らく牽強附会（けんきやうふくわい）の説でございませう。いや、跡方もない嘘と申した方が、宜しい位でございます。

それは兎も角もと致しまして、かやうに娘の事から良秀の御覚えが大分悪くなつて来た時でございます。どう思召したか、大殿様は突然良秀を御召になつて、地獄変の屏風を描くやうにと、御云ひつけなさいました。

六

地獄変の屏風と申しますと、私はもうあの恐ろしい画面の景色が、ありありと眼の前へ浮んで来るやうな気が致します。

同じ地獄変と申しましても、良秀の描きましたのは、外の絵師のに比べますと、第一図取りから似て居りません。それは一帖の屏風の片隅へ、小さく十王を始め眷属（けんぞく）たちの姿を描いて、あとは一面に紅蓮（ぐれん）大紅蓮（だいぐれん）の猛火が剣山刀樹も爛（ただ）れるかと思ふ程渦を巻いて居りました。でございますから、唐（から）めいた冥官（めうくわん）たちの衣裳が、点々と黄や藍を綴つて居ります外は、どこを見ても烈々とした火焔の色で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com